

寺院遺跡を歩こう

出雲国分寺は
こんなお寺だった

現在の松江市大庭町から竹矢町あたりは、古代出雲国の中心地で、さまざまな施設が置かれていました。その一つに、出雲国分寺があります。現在ここは史跡公園として整備されていますので、一緒に歩いてみましょう。あし遅れましたが、私イズモノオトヤマと言つたものです。この寺には多少関わりがありますので、私にご案内役を務めさせていただきます。



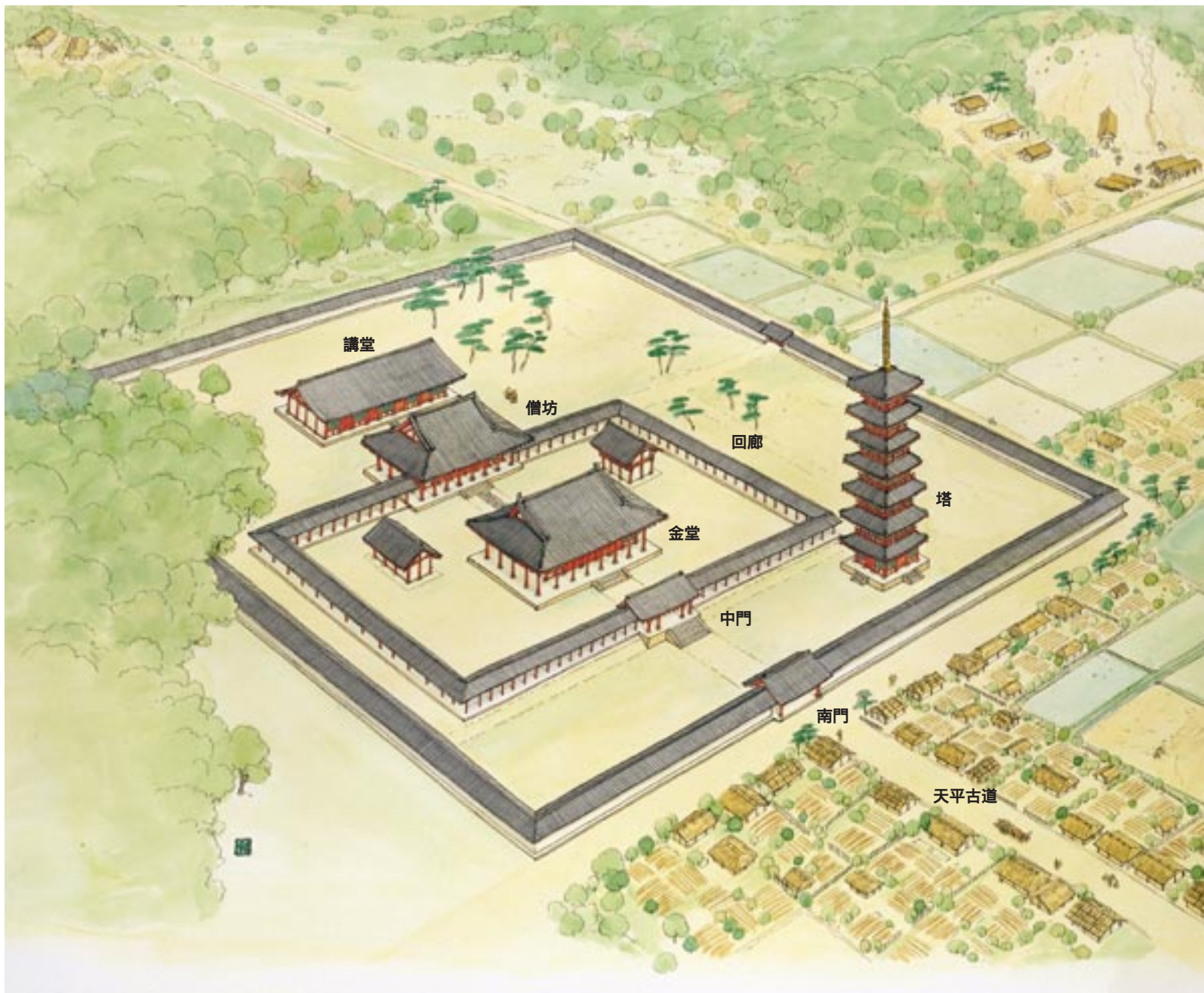
国指定史跡・出雲国分寺跡の全景(松江市竹矢町) 史跡公園として整備されており、だれでも見ることができる。



塔跡
中門より南側にあり、寺の中心部から大きく外に出されているのが特徴。ここに七層の塔が建っていたと思われる。



天平古道
南門から南へ一直線に続く道路。国分寺があった当時は、石敷きの舗装道路とも呼べるものだった。



塔はお釈迦様そのものをあらわした建物で、日本に仏教が伝わってきた直後は寺の中心に建てられていたようです。それが時代が移るにつれて、塔よりも仏像を奉じた金堂のほうに重要な役割が移って、私たちが国分寺を造っていたころは、回廊よりも外に出すことになっていました。

中門から中にはいって最初の建物が金堂、今で言う本堂です。金堂の後ろに講堂(お坊さんが勉強する所)(僧坊(お坊さんの住まい)と続きます。回廊は二番目の講堂につなげ、回廊で囲んだ中心に、出雲国分寺でもっとも重要な建物である金堂を配置しました。また金堂と講堂や僧坊をつなぐ道は、瓦を敷いた道路でつなげました。



金堂・講堂・僧坊
この寺のもっとも重要な施設が、一直線に並び、本尊を奉じた金堂が、一番前にある。

寺全体の敷地は方五〇〇尺、現代の単位で言えば約一五〇メートル四方という広大なものです。しかし、これだけの面積を平らに整地することはできなかったため、各建物を段々に高くするように配置しました。また寺の奥左手には山が迫っていたため、正方形に区画することができず、この部分だけ築地(堀)をつなげませんでした。

奈良の都からこれほど大規模な寺を造れという命令が来たときは、正直あわてたものです。あこのころの民家は柱を地面に直接立てた掘立柱建物が主流でしたし、寺の数や技術者もそんなに多くはありませんでした。そのため

公園内にはいると、広場がありませんが、建物は見えません。私が活躍したころには、遠くからでもこの寺の塔が見えたのですが……。よく見ると園内には、大きな段が三段ほど見え、石が並んでいる様子が見えます。これは出雲国分寺の建物の、壇と礎石(建物の基礎の部分)ですね。建物本体はすでに崩れ落ちており、基礎の部分だけを復元整備してあります。

公園の入口から振り返って後ろを見ると、一直線に道路が延びています。現在は天平古道と呼ばれていますが、この道の下の中には、現在の舗装道路のように石を敷き詰めた、立派な道路がありました。

「こここの道路がある」といまま私が立っている公園の入口は、南門にあたるようです。南門は寺の入口で、ここから北が寺の敷地内です。寺の中心部は回廊(屋根付きの廊下)で囲まれており、正面の入口は中門と呼ばれていました。

あれ、回廊よりも外側に、何か建物の壇が復元されていますね。そうそう、これが塔のあった場所です。奈良の都からの命令では、七層の塔を建てろと言っていたので、全国のほとんどの国で、この命令に従って七層の塔が建てられました。現在では、七層もある高層の塔はまったく残っていないようです。

め近隣の国の多くは、奈良の都から技術者を派遣してもらい、平城宮と同じデザインの瓦を賣っています。その点出雲では、新羅風の繊細な瓦を使ったりして、近隣諸国にはない独自色を出すことに成功しています。

出雲では国分寺を造るために国中からたくさんの方を招き集め、多くの新技術を導入しました。せっかくの技術を忘れてしまつても惜しい気がしたので、このとき私の氏寺も一緒に改修することにしました。国分寺とは違う造りですが、新羅風のデザインを使うなど、国分寺と同じ最新の技術を使った大改修を行いました。

私に関わった出雲国分寺はこんなお寺でした。ぜひ現地に行つて、当時の国分寺の様子を想像してみてください。



蓮華と唐草・鬼
出雲国分寺の屋根に使われていた瓦は、蓮華と唐草を組み合わせた繊細華美なものであった。それに対して鬼瓦は、躍動感あふれた大胆な造形をしている。大胆さと繊細さを持ち合わせているのが、出雲国分寺の特徴。



国分寺の森
この土地に、方500尺(150m)四方の正方形を造ることはできなかったため、北西隅の一角は自然の山をそのまま区画として使われたと考えられる。

イズモノオトヤマさんは、架空の人物ですが、出雲臣弟山」といって、八世紀ころに実在した出雲国造をモデルにしています。『出雲国風土記』にも出てくる人物で、出雲国分寺が造られるころの七十四六年に国造になったと考えられています。